

1 a 器官
b 損傷
c 正味

2 A 文明
B 分解
C 安全
D 消費
3 食糧危機

4 I ウ
II エ
III イ
5 (記述題)
6 ストロマトライト

7 (記述題)
8 地 盾
9 W イ
X エ
Y ア
Z ウ
10 イ・エ
(順不同・完答)

2 a 競技
b 種目
c 補欠

2 I エ
II ウ
III ア
IV イ
3 W イ
X ア
Y イ
Z ア
(完答)

4 A ヒ
B ま
C 三
5 エ
6 仲よ
飾る
(完答)

7 小学校から
8 みらいだけ
9 (記述題)
10 エ
11 イ

1 好気呼吸によって酸素をエネルギーの生成に利用して消費するようにしたこと。
(同意可)

7 オゾンによって、生物にとつて危険な紫外線が陸地の地表に届きに
(同意可)

2 仲よし四人組の一人であるみらいに自分を最後の公式戦のメンバ―から外す決断をされ、今までの努力がすべて無意味になると思ひし。ヨックを受けるとともに、キャプテンとしてふがない。自分情けなく思つている。

[配点]	
1	1
5	7
2	2
9	14
1	3
2	18
1	26
4	56
6	18
7	26
14	56

1

- 1 a 「器官」は生物体を構成する一部分。同音異義語が多数あるので確実に区別しておきたい。b 「損傷」はそこなわれ傷つくこと。「傷」の形には注意すること。c 「正味」はこの場合、実質的な数量のこと。
- 2 A 「原始→文明」、B 「合成→分解」、C 「危険→安全」、D 「生産→消費」。どれも基本的な対義語である。ちなみに、BとDは解答自体が本文中にも出ている。読解にも対義語の知識は役立てたいところである。
- 3 次の段落に、「光合成の能力を獲得したおかげで」「食糧危機は一気に解決したのです」とある。「解決」という言葉をヒントにさがすのも一つの手だが、大事なのは通読時に「光合成の能力を獲得した」→「食糧危機が解決した」という、この段落で述べられていた「話」をつかんでおくことである。
- 4 I：「自然に化学合成された有機物を利用するしかありませんでした」→つまり「つねに食糧危機の不安があったわけです」
II：「危険な存在」→しかし「利用（好気呼吸）する」
III：「真核生物」の出現→さらに「陸上で生活する生物も登場」
- 5 「大気汚染（環境汚染）」「解決」といった関連ワードが（中略）のあとの段落の最後の文にある。この段落の内容をうまくまとめよう。この文章は地球で起きたことを順序立てて並べているので、流れをつかむように読んでほしい。
- 6 「これはく縞状構造です」とあるので、「構造」を指していることがわかる。それをふまえて直前を見ると、「ストロマトライトという構造」とあるので、これを指していると思われる。なじみのないカタカナ語であろうから、書き間違えないように気をつけよう。
- 7 オゾンについて詳しく書いてあるのは——線④がある段落のみなので、この段落から答えが作れると見当をつける。——線⑤をふくむ文に「成層圏にできたオゾンのために、紫外線は陸地の地表にも届かなくなりました」とある。これを中心に答えを作ればよい。紫外線が生物にとつてどういふものかということも説明しておいてほしい。
- 8 生物を紫外線から守るといふところを「盾」にたとえているのである。問7の解説で述べたように、オゾンの説明はこの段落にしかない。比喩を用いた言いかえもこの段落にあると推測すべきである。問7の解説で述べたように、オゾンの説明はこの段落にしかない。比喩を用いた言いかえもこの段落にあると推測すべきである。
- 9 アの冒頭「その安全となった陸」に注目すると、アの前がエであるとわかる。また、エの冒頭「生物が生み出した酸素」に注目すると、エの前がイであるとわかる。ウは「海でも陸でも安定な」とあるので、これらよりも後ということになる。ちなみに、これらの内容は本文で説明してきたことを順番になぞる内容にもなっている。
- 10 アは「35億年前」が誤り。「はつきりとした化石」は28億年前のものである。ウは「それ以前にはいなかった」が誤り。「それ以前には、すでに酸素を利用できる生物がいたはず」とあった。

2

- 1 a 「競技」は一定のルールに則^{のっと}って技術や運動能力を競^まい合うこと。「協議」などの同音異義語もあるので確実に区別しよう。b 「種目」は種類によって分けた一つ一つの項目。c 「補欠」は欠員を補うための予備の人員。「補」は書き取りで出される漢字としては数少ない「ころもへん」の漢字である。
- 2 Iは「少しづつまばらに」という意味の「チラホラ」が入る。IIは急に大きく下がることを示す「がくんと」が入る。IIIはまさに曇り空を表す「どんよりと」が入る。IVはざわついている様子を表す「わさわさ」が入る。
- 3 Wの「エース」は「不在」とあるので、ケガをしている沙風だと結びつけられる。Xのキャプテンはいるんなところでわかるが、Xの次の行に「キャプテンどうにかしてよって顔で、みんながわたしを見る」とあるのがわかりやすいだろう。「わたし」の名前が真歩だというのは葉月が「わたしだつて真歩だつて」といった発言を「葉月がわたしの分までかばつてくれる」と表現しているところである。Yは沙風の過去の発言を「わたし」が思い浮かべていることに注意する。Zは「わたし（真歩）」が言いたいことである。
- 4 A 「ヒステリック」：異常に興奮しているさま。B 「まどろっこしく」(まどろっこしい)：することがのろいのでいらいらするさま。C 「第三者」：当事者以外の人。
- 5 直後の「何度教えても、定理や公式を理解できない生徒を見るような目」という比喩からみらいの心情をイメージする。「どうしてわかんないの?」といった感じだろう。ウは比喩がそのまま残つてしまっている。
- 6 美羽留が一走に入ること、仲よし四人組の誰かがメンバーから外れる。つまり、仲よし四人組で最後を飾ることはできなくなるといふことである。
- 7 先生の考えとしては、実際の仲よし四人組のうちの一人であるみらいに決めさせることで、強制的に上から決めた形ではないようにしたのでらう。それによりこの決定を覆^{くつがえ}しがたいものにしたかったのである。
- 8 「たとえそうだとでも、みんなで決めること」をかみ砕くと「たとえみらいだけが本気で勝ちたいと思つていたとしても、みらい一人に決めさせるのはおかしい」となる。
- 9 みらいの一言で、自分が外れることが決定的になったのである。同じ仲よし四人組の一人であるみらいが本気で勝ちたいという気持ちを優先し、「わたし」を外す苦渋^{くじゆ}の決断をしたことは、ショックでもあるが、受け入れざるを得ない現実でもあった。それは「でも受け止めなさいいけない事実」や「先生と目が合い思わずうつむいた」「わたしは黙つて待つしかなかった」などにも表れている。
- 10 「不適当なもの」である。「ふざけんなよ!」という言葉からも「怒り」の要素であり、「同情」ではないことがわかる。
- 11 「合わないもの」を選ぶことに注意する。イは「平和で穏便に過ごしたい」というのが違う。ヒステリックにどなる場面や、先生にくつつかかる場面もある。